

4 花き

(1) キク <露地栽培・ハウス栽培>

キクは比較的浅根性であるため、土壌条件により生育・品質が大きく影響されやすく、良品生産のためには適切な土壌・肥培管理が必要である。このため、定植前に圃場の土壌診断を実施し、この診断結果に基づいて良質なたい肥や土壌改良資材を適量施用し、積極的な土づくりを行うことが大切である。

施肥は、肥効調節型肥料や有機質肥料を主体とし、土壌診断結果に基づいた適正な施用量とする。その際、たい肥に含まれる可給態窒素、リン酸、カリ等の肥料成分を十分考慮し、施肥量を軽減する。追肥は、生育状況に応じながら点滴液肥灌水等により必要量を与える。

キクは降雨によって病害が発生・伝染しやすいため、雨除けフィルム等による被覆やマルチ栽培、展着剤の効果的な利用により殺菌剤の使用量を節減する。また、防虫ネット等による被覆や生物農薬の使用によって殺虫剤の使用量を節減する。さらに、連作によって土壌病害が発生しやすい圃場においては、田畑輪換や太陽熱等を利用した土壌消毒を積極的に行う。なお、防除にあたっては、発生予察情報や粘着トラップ等の利用に基づいた適期防除に努め、効率的かつ効果的な防除を図る。

除草には機械除草を用い、除草剤の使用を節減する。

区 分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安 (作期あたり)
たい堆肥等施用技術	○完熟たい肥を施用する。	たい肥 2 t /10a
化学肥料低減技術	○肥効調節型肥料を施用する。 ○有機質肥料を施用する。 ○局所施肥（点滴液肥灌水）を行う。	化学肥料窒素 成分量 12.0 kg /10a 以下
化学農薬低減技術	○機械除草を行う。 ○生物農薬を利用する。 （対象病虫害：オオタバコガ） ○雨除け被覆栽培を行う。 （対象病虫害：白さび病等） ○ハウス開口部を防虫ネット等で被覆する。 （対象病虫害：アブラムシ類、アザミウマ類、ハモグリバエ類等） ○マルチ栽培を行う。（対象：雑草） ○土壌還元消毒を行う。 ○熱利用土壌消毒を行う。 ○光利用技術（黄色蛍光灯、シルバーフィルム等）を行う。 ○天然物質由来農薬を利用する。	化学農薬使用 回数（合計） 35回以下
その他の留意事項	○土壌診断の結果に基づいて施肥量やたい肥の施用量を調整する。 ○たい肥の施用量は、稲わらたい肥を前提とした目安であり、家畜ふんたい肥等を用いる場合や、使用の目安を超えるたい肥を施用する場合は、別表を参考に行う。なお、鶏ふん等たい肥を使用する際は、C/N比がおおむね10以上であることを確認すること。 ○防虫ネットは対象病虫害等を考慮して選定する。	

注) 化学農薬使用回数とは単なる農薬の使用回数ではなく、散布した薬液等に含まれる有効成分の数を施用（経歴）ごとに合計した数である。

(2) トルコギキョウ

<ハウス栽培>

トルコギキョウは本県の代表的な施設切り花であるが、特に土壌の物理性や塩類濃度等に生育・品質が大きく影響されやすく、良品生産のためには適切な土壌・肥培管理が必要である。このため、定植前に圃場の土壌診断を実施し、この診断結果に基づいて良質なたい肥や土壌改良資材を適量施用し、積極的な土づくりを行う。

施肥は、肥効調節型肥料や有機質肥料を主体とし、土壌診断結果に基づいた適正な施用量とする。その際、たい肥に含まれる可給態窒素、リン酸、カリ等の肥料成分を十分考慮し、施肥量を軽減する。また、生育状況に応じながら必要量を追肥する。

トルコギキョウは初期生育が緩慢なため、雑草にまかれて欠株や病害発生を助長することがある。このため、これらの原因となる雑草の発生を抑制するため、機械除草やマルチ栽培を行い初期生育の促進と殺菌剤・除草剤の使用量を節減する。また、防虫ネット等の被覆によって害虫の飛来を防ぎ、殺虫剤の使用量を節減する。さらに、連作によって土壌病害が発生しやすい圃場においては、太陽熱・蒸気消毒による土壌消毒を積極的に行う。なお、防除にあたっては、発生予察情報や粘着トラップ等の利用に基づいた適期防除に努め、効率的かつ効果的な防除を図る。

区 分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安 (作期あたり)
たい肥等施用技術	○完熟たい肥を施用する。	たい肥 1 t /10a ※上限を2 t /10aとする
化学肥料低減技術	○肥効調節型肥料を施用する。 ○有機質肥料を施用する。	化学肥料窒素 成分量 9.6kg/10a以下
化学農薬低減技術	○機械除草を行う。 ○ハウス開口部を防虫ネット等で被覆する。 (対象病害虫：アブラムシ類、アザミウマ類等) ○マルチ栽培を行う。(対象：雑草) ○土壌還元消毒を行う。 ○熱利用土壌消毒を行う。 ○光利用技術(粘着資材等)を行う。 ○天然物質由来農薬を利用する。	化学農薬使用 回数(合計) 10回以下
その他の留意事項	○土壌診断の結果に基づいて施肥量やたい肥の施用量を調整する。 ○たい肥の施用量は、稲わらたい肥を前提とした目安であり、家畜ふんたい肥等を用いる場合や、使用の目安を超えるたい肥を施用する場合は、別表を参考に行う。なお、鶏ふん等たい肥を使用する際は、C/N比がおおむね10以上であることを確認すること。 ○F ₁ 品種は、固定種よりも窒素量を少なめにする等、品種により施肥を調整する。 ○防虫ネットは対象病害虫等を考慮して選定する。	

注) 化学農薬使用回数とは単なる農薬の使用回数ではなく、散布した薬液等に含まれる有効成分の数を施用(経歴)ごとに合計した数である。

(3) 宿根カスミソウ <露地栽培・ハウス栽培>

宿根カスミソウは、土壌条件により生育・品質が大きく影響されやすく、良品生産のためには適切な土壌・肥培管理が必要である。このため、定植前に圃場の土壌診断を実施し、この診断結果に基づいて良質なたい肥や土壌改良資材を適量施用し、積極的な土づくりを行う。

施肥は、肥効調節型肥料や有機質肥料を主体とし、土壌診断結果に基づいた適正な施用量とする。その際、たい肥に含まれる可給態窒素、リン酸、カリ等の肥料成分を十分考慮し、施肥量を軽減する。また、生育状況に応じながら必要量の追肥を行う。

宿根カスミソウは、降雨によって病害が発生・伝染しやすいため、雨除けフィルム等による被覆やマルチ栽培、生物農薬の使用、展着剤の効果的な利用により殺菌剤・除草剤の使用量を節減する。さらに連作によって土壌病害が発生しやすい圃場においては、太陽熱・蒸気熱等消毒による土壌消毒を積極的に行う。なお、防除にあたっては、粘着トラップ等の利用に基づいた適期防除に努め、効果的かつ効果的な防除を図る。

区 分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安 (作期あたり)
堆肥等施用技術	○完熟たい肥を施用する。	たい肥 1.5 t/10a
化学肥料低減技術	○肥効調節型肥料を施用する。 ○有機質肥料を施用する。	化学肥料窒素 成分量 11.2kg/10a以下
化学農薬低減技術	○機械除草を行う。 ○雨除け被覆栽培を行う。(対象病虫害：疫病等) ○マルチ栽培を行う。(対象：雑草) ○熱利用土壌消毒を行う。 ○光利用技術(UVカットフィルム等)を行う。 ○天然物質由来農薬を利用する。	化学農薬使用 回数(合計) 8回以下
その他の留意事項	○土壌診断の結果に基づいて施肥量やたい肥の施用量を調整する。 ○たい肥の施用量は、稲わらたい肥を前提とした目安であり、家畜ふんたい肥等を用いる場合や、使用の目安を超えるたい肥を施用する場合は、別表を参考に行う。なお、鶏ふん等たい肥を使用する際は、C/N比がおおむね10以上であることを確認すること。 ○高温期は品質低下を防ぐため、降雨状況に応じて雨除けフィルムの被覆・除去を行う。	

注) 化学農薬使用回数とは単なる農薬の使用回数ではなく、散布した薬液等に含まれる有効成分の数を施用(経歴)ごとに合計した数である。

(4) リンドウ <露地栽培・ハウス栽培>

リンドウは栽培期間が長い作物であるため、土壌条件により生育・品質が大きく影響されやすく、良品質生産のためには適切な土壌・肥培管理が必要である。

このため、定植前に圃場の土壌診断を実施し、この診断結果に基づいて良質なたい肥や土壌改良資材を適量施用し、積極的な土づくりを行う。

施肥は、肥効調節型肥料や有機質肥料を主体とし、土壌診断結果に基づいた適正な施用量とする。その際、たい肥に含まれる可給態窒素、リン酸、カリ等の肥料成分を十分考慮し、施肥量を軽減する。また、生育状況に応じながら必要量の追肥を行う。

特にリンドウは酸性土を強く好み、畑地では土壌病害や線虫の被害を受けたり、乾燥によって品質低下となりやすいため、水田転換畑に作付することが望ましい。

また、除草については機械除草を行い、除草剤の使用量を節減するとともに、降雨によって病害が発生・伝染しやすいため、雨除けフィルム等による被覆やマルチ栽培、展着剤の効果的な利用により殺菌剤の使用量を節減する。また、施設においては防虫ネット等の被覆により害虫の飛来を防ぎ、殺虫剤の使用量を節減する。なお、防除にあたっては、発生予察情報や粘着トラップ等の利用に基づいた適期防除に努め、効率的かつ効果的な防除を図る。さらに連作により土壌病害が発生しやすい圃場においては、太陽熱・蒸気等を利用した土壌消毒を積極的に行う。

区 分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安 (作期あたり)
たい肥等施用技術	○完熟たい肥を施用する。(施用時期は定植前に行う。)	たい肥 3 t /10a ※たい肥は定植前に施用する
化学肥料低減技術	○肥効調節型肥料を施用する。 ○有機質肥料を施用する。	化学肥料窒素 成分量 8.0kg/10a以下 ※定植2年目以降の年間施用量である
化学農薬低減技術	○機械除草を行う。 ○雨除け被覆栽培を行う。 (対象病虫害:葉枯病等) ○ハウス開口部を防虫ネット等で被覆する。 (対象病虫害:リンドウホソハマキ、アザミウマ類等) ○マルチ栽培を行う。(対象:雑草) ○熱利用土壌消毒を行う。 ○光利用技術(粘着資材等)を行う。 ○天然物質由来農薬を利用する。	化学農薬使用 回数(合計) 23回以下
その他の留意事項	○土壌診断の結果に基づいて施肥量やたい肥の施用量を調整する。 ○たい肥の施用量は、稲わらたい肥を前提とした目安であり、家畜ふんたい肥等を用いる場合や、使用の目安を超えるたい肥を施用する場合は、別表を参考に行う。なお、鶏ふん等たい肥を使用する際は、C/N比がおおむね10以上であることを確認すること。 ○エゾリンドウ系は、水田転換畑に作付することを原則とする。 ○褐色根腐病対策として排水対策を行う。 ○防虫ネットは対象病虫害等を考慮して選定する。	

注) 化学農薬使用回数とは単なる農薬の使用回数ではなく、散布した薬液等に含まれる有効成分の数を施用(経歴)ごとに合計した数である。

(5) ストック <ハウス栽培>

ストックは比較的栽培期間が短いため、ハウスの有効活用として補完的な導入も多い品目である。そのため、特に生育が前作の残存窒素成分の影響を受けやすい。このため、定植前に圃場の土壌診断を実施し、この診断結果に基づいて良質なたい肥や土壌改良資材を適量施用し、積極的な土づくりを行う。

施肥は、肥効調節型肥料や有機質肥料を主体とし、土壌診断結果に基づいた適正な施用量とする。その際、たい肥に含まれる可給態窒素、リン酸、カリ等の肥料成分を十分考慮し、施肥量を軽減する。また、生育状況に応じながら必要量を追肥する。

特にストックは、コナガの被害を受けやすいため、防虫ネット等の被覆や生物農薬の使用によって殺虫剤の使用量を節減する。また、雑草防除では機械除草やマルチ栽培を行い、除草剤の使用量を節減する。

さらに、連作によって土壌病害が発生しやすい圃場では、太陽熱や蒸気等の土壌消毒を行う。なお、防除にあたっては、粘着トラップ等の利用に基づいた適期防除に努め、効率的かつ効果的な防除を図る。

区 分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安 (作期あたり)
たい肥等施用技術	○完熟たい肥を施用する。	たい肥 2 t /10a
化学肥料低減技術	○肥効調節型肥料を施用する。 ○有機質肥料を施用する。	化学肥料窒素 成分量 12.8kg/10a以下
化学農薬低減技術	○機械除草を行う。 ○生物農薬を使用する。(対象病虫害:コナガ) ○ハウス開口部を防虫ネット等による被覆を行う。 (対象病虫害:コナガ、アブラムシ類等) ○マルチ栽培を行う。(対象:雑草) ○土壌還元消毒を行う。 ○熱利用土壌消毒を行う。	化学農薬使用 回数(合計) 6回以下
その他の留意事項	○土壌診断の結果に基づいて施肥量やたい肥の施用量を調整する。 ○たい肥の施用量は、稲わらたい肥を前提とした目安であり、家畜ふんたい肥等を用いる場合や、使用の目安を超えるたい肥を施用する場合は、別表を参考に行う。なお、鶏ふん等たい肥を使用する際は、C/N比がおおむね10以上であることを確認すること。 ○防虫ネットは対象病虫害等を考慮して選定する。	

注) 化学農薬使用回数とは単なる農薬の使用回数ではなく、散布した薬液等に含まれる有効成分の数を施用(経歴)ごとに合計した数である。

(6) カラー <露地栽培・ハウス栽培>

県内では、比較的透水性の良いほ場を好む畑地性カラーを中心に栽培されており、土壌条件により生育・品質が大きく影響されやすいことから、良品質生産のためには適切な土壌・肥培管理が必要である。

このため、定植前に圃場の土壌診断を実施し、この診断結果に基づいて良質なたい肥や土壌改良資材を適量施用し、積極的な土づくりを行う。

施肥は、肥効調節型肥料や有機質肥料を主体とし、土壌診断結果に基づいた適正な施用量とする。その際、たい肥に含まれる可給態窒素、リン酸、カリ等の肥料成分を十分考慮し、施肥量を調整する。また、生育状況に応じながら追肥を行う。

カラー栽培では土壌病害が発生しやすいため、雨除けフィルム等による被覆や遮光資材による地温上昇防止により殺菌剤の使用量を節減する。また、雑草防除では機械除草や敷きわらマルチ栽培を行い、除草剤の使用量を節減する。

さらに連作によって土壌病害が発生しやすいほ場においては、太陽熱・蒸気熱等消毒による土壌消毒を積極的に行う。なお、防除にあたっては、粘着トラップ等の利用に基づいた適期防除に努め、効率的かつ効果的な防除を図る。

区 分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安 (作期あたり)
堆肥等施用技術	○完熟たい肥を施用する。	たい肥 1 t /10a
化学肥料低減技術	○肥効調節型肥料を施用する。 ○有機質肥料を施用する。	化学肥料窒素 成分量 6.4kg/10a以下
化学農薬低減技術	○機械除草を行う。 ○雨除け被覆栽培を行う。 (対象病害虫：軟腐病等) ○マルチ栽培を行う。(対象：雑草) ○熱利用土壌消毒を行う。	化学農薬使用 回数(合計) 4回以下
その他の留意事項	○土壌診断の結果に基づいて施肥量やたい肥の施用量を調整する。 ○たい肥の施用量は、稲わらたい肥を前提とした目安であり、家畜ふんたい肥等を用いる場合や、使用の目安を超えるたい肥を施用する場合は、別表を参考に行う。なお、鶏ふん等たい肥を使用する際は、C/N比がおおむね10以上であることを確認すること。 ○品質低下や軟腐病の発生を防ぐため、遮光資材により地温上昇を防止する。	

注) 化学農薬使用回数とは単なる農薬の使用回数ではなく、散布した薬液等に含まれる有効成分の数を施用(経歴)ごとに合計した数である。